

適正施設ガイドライン

【ユキヒョウ *Uncia uncia*】

2021年3月

公益社団法人日本動物園水族館協会

はじめに

ユキヒョウは、中央アジアの山岳地帯、ヒマラヤ山脈、モンゴル、ロシアなど、およそ12か国に分布し、高山地域の急峻な岩場、草原、森に生息している。標高500m～5,800mにおよぶ範囲を降雪や気温変化に合わせ標高移住しているとされる。

通常単独で生活し、100km²前後の行動圏を数日間かけて回る。その範囲は雌より雄の方が広く、雄の行動圏の中に複数の雌が行き来しているとされる。100km²あたりの生息数は地形や獲物となる動物の生息数によって変動するとされる。

頭胴長1,000～1,300mm、尾長800～1,000mm。体重は成獣で35～45kg、雄は雌よりやや大きい。広い足裏、太い四肢、厚みのある長い尾を持ち、切り立った岩場を移動するのに適している。毛色は腹部が白から明るい灰色で、背にかけてくすんだ灰色から淡黄色となる。全体に黒色から濃灰色の斑点がある。保温性に富み寒冷な環境にも耐える。

交尾期は1～3月、雌の妊娠期間は90～105日で4～6月に出産する。産仔数は2～3頭。バーラル、ヒマラヤタール、アイベックスなどの草食動物を主な獲物とし、マーモット、ウサギ、鳥などの小動物も捕食する。

獲物の減少や毛皮を目的とした局所的な密猟、獣害駆除などによりその数を減少させている。

1 飼育環境

ユキヒョウが安全で快適に生活出来るよう、本来の習性に合わせ動物福祉を重視した飼育環境を用意すべきである。また、人と動物双方の安全が守られるよう、この動物の特性である俊敏さに対応し得るしっかりと脱出防止策を備え、完全間接飼育が可能な施設である必要がある。

本種は特定動物に指定されており、計画時には所轄官庁への許可申請が必要である。飼養許可基準は各所轄官庁ごとに設定されており、それに基づく必要がある。

1-1 温度

適正温度は屋内外通じて-20℃以上25℃未満とする。

寒冷地に適応した体をもつため比較的寒さには強く、暑さに弱い傾向があり、暑熱対策は必須である。また、老齢、傷病、体濡れ、麻酔覚醒管理時など、保温が必要となる場合もある。

エアコン、送風機、日除け、床暖房等を設置し、上記範囲内であっても、各個体の状態をよく観察し、使用する必要がある。

1-2 湿度

30～80%前後とする。

上記範囲外でも、ただちに体調を崩す要因とはならないが、乾燥した地域に生息する動物であるため、高湿度は出来るだけ排除することが望ましい。

1-3 音、振動

通常時には特別な配慮は必要ないが、普段と違う物音や大きな音や振動、その他異常音（付近での建設、機械音、大型車両など）がストレスとなり得ることに留意し、必要に応じて防音・防振措置を行う。妊娠・出産、子育て中の場合には特別な配慮が必要で、出産前後には獣舎周辺はもちろん、舎内作業にも注意を払う必要がある。また、生後1カ月間は獣舎周辺の工事・作業は控え、安静に務めるべきである。

1-4 照明

1) 室内には、常に動物や施設の状態がしっかりと確認できる照明が必要である。光源は蛍光灯の他にUVライトが推奨される。LEDについて、その影響はまだ報告されていない。現状では利用可能とする。日中は点灯し、夜間は消灯する。特別な日長調整は必要ない。さらに天窗などを設置し出来るだけ多くの自然光を取り込めるようにするのが望ましい。

- 2) 屋外には夏場の暑熱対策として日除けを設置し、陽の当たる場所と日陰でユキヒョウが居場所を選択出来るようにするのが望ましい。

1-5 面積、容積

各基準について、多少面積が不足する場合でも立体構造やレイアウトの工夫でユキヒョウの動きが十分に生かせると判断される場合にはこの限りではない。また、繁殖計画外の老齢個体や傷病個体を単性飼育する場合には、面積よりも安全な終生飼育を優先する。

- 1) 屋外放飼場・展示場

適正面積は 80 m² (1 辺を 5m 以上)、高さ 5m 以上とする。

繁殖を前提とした複数頭飼育では 2 面以上備える事が望ましい。

- 2) 寝室

1 室あたりの適正面積は 5 m² (1 辺を 2m 以上) 高さ 2.5m 以上とする。

1 頭につき 1 室用意する。妊娠・出産時の管理、得られた繁殖仔の育成に備えて、飼育頭数プラス 2 室を備えるべきである。

1-6 構造、設備

- 1) 屋外放飼場・展示場

高い運動能力を持つ動物のため、天井まで完全に塞がれた囲いを用意するべきである。

また、嵐や雪、落木等に耐えられるよう十分な強度を備え、基盤は深く埋め込まれるべきである。

場内には出来るだけ複雑さを取り入れるように配慮する。ペーシングに費やす時間と囲い内の複雑さには負の相関があるとされる。

また、囲いのメンテナンスや場内のレイアウト変更、補修等のため、アクセスしやすい大きな出入口を設ける事を推奨する。

エンリッチメントに利用される様々な取り組みは、ユキヒョウのケガや事故を避け、運動や楽しみの機会、刺激、複雑さを与えられるよう、慎重に選ぶべきである。

以下サイズ基準は各所管官庁による指定についても確認が必要である。

- ① 囲いには金属製のネット・格子を推奨する。

ユキヒョウの手が出ないよう、ネット・格子幅は 5 cm 以内が良い。縦幅は 10 cm 程度あってもよいがネコ科他種で手首を回して手を出す例があるため、人との距離を取れない場合には縦幅も 5 cm 以内が安心である。ユキヒョウが歯をかけたり手で押し広げようとする事があるため、十分な強度を備え、定期的な点検、補修維持管理が必要である。床面において掘り返しによる脱柵を防ぐため、基部構造を備える必要がある。ジャンプや網を駆け上がって天井に到達する事もあり得るので、天井部にも十分な強度が必要である。

- ② 場内の地面は土をメインとし、部分的に砂、コンクリート等を採用するのが望ましい。

ユキヒョウは飼育下、野生下共に植物の採食行動が報告されており、毒性の可能性のあるものを除き、イネ科やシダ類など複数種の植層があるのが望ましい。また、掘る、転がるという欲求にも、土、草面は対応出来る。多湿やその環境を好む有害生物、ダニやヘビ等を招く要因ともなるため、除草作業や土の入れ替え等の維持管理が必要である。また、土流れを考慮し、土止めや雨水排水について計画の段階で考慮しておく必要がある。

- ③ 高低差を利用したレイアウトにするべきである。

擬岩や大きな岩、やぐら等を設置し、地面から離れて休む休憩所を複数用意して、ユ

キヒョウが自由に居場所を選択できるようにする。高い場所ではユキヒョウは辺りを伺ったり風を受けて楽しみ、また、獲物に見立てた遊具を併用する事で、狩りを模したダイナミックな動きを引き出す事が出来る。また、入れ替え可能な丸太や切り株を立てかけたり地面に埋め込み立てる事も有効である。爪とぎ行動を引き出して巻爪を防ぎ、その他様々なエンリッチメントに利用する事も出来る。

- ④ 自生可能な低木を植える事も推奨される。

日陰を提供し景観上も美しく、爪とぎ、エンリッチメントとしても利用できる。(樹種に関しては現在調査中。) ネット・格子から離して植える等安全面の配慮と、枝がフェンスを傷付けないよう剪定等の定期的な維持管理が必要である。

- ⑤ 一部に雨除けを設置すると急な悪天候時に安心である。

- ⑥ 給水所を設置する。

景観を考慮して、滝や流れの形を模したり、岩場の隙間で飲水出来るデザインが多く採用されている。常に新鮮で清潔な水が供給出来るようオーバーフロー式や、水受けのメンテナンスが容易に出来る構造であることが望ましい。タイマー式や放飼場の外から給水量をコントロール出来る構造だと管理しやすい。また、維持可能な排水機能を計画時から十分配慮する必要がある。

水浴びは好まない動物なので、プールの設置は特に必要ないと思われる。

- ⑦ ペアリングなど複数個体を同時に放飼する場合に備え、寝室の出入り口が2つ以上ある構造にすると管理しやすい。

- ⑧ 観覧者の安全のため、人止め策の設置が必要である。囲いとの距離は1m以上あれば良い。場合によっては囲いの格子・フェンスの幅を小さくしたり、強化ガラス面にする。

- ・ 非展示の放飼場も設置する事が望ましい。幼獣と母獣の放飼練習や老齢・治療個体等の日光浴、健康管理のため、非展示の放飼場があると良い。
- ・ 展示、非展示放飼場共に必要に応じてレイアウトを変更するようにする。

2) 寝室

寝室では多くの時間を過ごす事になるため、それに合わせた注意が必要である。安心して採食、休養が出来る場所である事、居場所の選択肢が与えられるよう、立体的な利用をするなどレイアウトを工夫し、個体の状態に合わせて変更する。

- ① ユキヒョウは基本的に単独で生活する動物なので、寝室と寝室の間は隣が見えない壁が必要である。

その他の部分で格子構造を設ける場合には、放飼場の基準と同様とする。

- ② 管理者が室内を観察する視点からの室内の死角を無くし、動物の居場所と状態が常に確認出来るようするべきである。

また、ユキヒョウの出入り口と、管理者の出入り口それぞれの扉の開閉、施錠の確認が容易な配置構造にするべきである。

- ③ ユキヒョウの移動扉は、落とし扉や横スライド式で動力は油圧や手動方式が主流である。扉は向こう側の見える格子扉と、完全に塞ぐことの出来る金属板の2枚扉構造にするのが望ましい。また、動物を扉で挟む事故等を防ぐため、開閉動作を作業者の目で確認しながら操作できる配置構造にするべきである。非常時には、動力を手動に切り替えたり、発電装置を備える等、対応可能な設備を備える事を推奨する。

老齢、傷病個体の管理を想定し、出入口は平坦な配置であるのが望ましい。

- ④ 各寝室間で扉等を開閉することにより動物の行き来が可能になる構造だと出産管理

や仔の育成期等、様々な場面で管理しやすい。隣り合う個体の関係によっては隙間や扉のガタツキなどを気にするので、構造や設置位置に配慮が必要である。

- ⑤ 床面は水洗い清掃、消毒が出来るようコンクリートが望ましい。表面は滑りにくいように加工するべきだが、ヤスリ形状が強いと肉球を痛める原因になるので程度に配慮をする。
- ⑥ 室内の隅、もしくは室外周囲に排水口を設ける。水を切りやすいよう勾配をつけておくと管理がしやすい。また、採尿出来るよう排水口に受け皿を取り付けられるようにしたり、床の隅に尿受けを付けておくと便利である。
- ⑦ 給餌口を設ける。落下型、回転可動式等があるが、いずれもユキヒョウの手が出ないよう十分な深さを持たせる、仕切りを取り付けるなどし、未使用時の蓋やストッパーを取り付ける工夫をする。
- ⑧ 水飲みを設ける。ユキヒョウが動かさないよう固定し、常に新鮮で清潔な水が供給出来るようオーバーフロー式や、水受けのメンテナンスが容易に出来る構造であることが望ましい。給水量は寢室の外で操作出来ると管理しやすい。
- ⑨ 寝台を設置する。ユキヒョウが立体的な動きをし、十分に横になって休めるよう、1.2 m×0.5m位の大きさが適当。床から1メートル程度の高さに接地する。木製にすると爪とぎや吸湿などの点で良好。床のコンクリートと材質や高さを変え、選択肢を増やす。

3) その他設備

- ① シュート：ユキヒョウの移動通路としてキーパー通路の下や寢室、放飼場間に設置される事が多い。いずれもユキヒョウの位置が把握出来、扉操作と開閉・施錠確認が確実に行える構造にするべきである。大きさは横 60 cm×縦 90 cm程度が適当。
- ② 産室：通常寢室をそのまま産室とする場合が多い。その際には母獣がより安心出来るよう、一部に産箱を設置する事を推奨する。大きさ等は寢室の構造により異なる場合が多いが、周囲からの視線を防ぎ、内部で親子が横臥して寛ぐことが出来るようにする。監視カメラを設置し、出産と仔の様子を親子に影響を与えずに確認・観察出来るようにする事を推奨する。
- ③ スクイーズケージ：採血や無麻酔での治療、麻酔導入時などに備え設置を推奨する。日常的に行うトレーニングの場所として使えば、より有効である。格子の形状はユキヒョウの体へのアクセスのため縦構造のみとする場合が多い。想定する作業と安全性を考えて設計する。
- ④ 体重計：日常的に移動するシュートの床面や、寢室の寝台、放飼場の一部などに設置出来ると良い。コードを噛み切ったり、電池の誤嚥等の事故を防ぐよう十分な安全保護対策が必要。
- ⑤ トレーニングエリア：ユキヒョウは馴致により採血、爪切り等、必要とされる体のケアを行う事が出来るようになる。動物、人に負担をかけずに日常的に実施できる施設を設ける事を推奨する。ユキヒョウの手が出ない格子越しに体を横に付けるよう台を設置し、尾などを引き出す等の作業用間口を設ける。多頭飼育の場合には1か所では日常的に使用する事が難しいので、各寢室にこの設備がある事が望ましい。

1-7 水（水質）

水道水、井戸水等、飲水に適した新鮮で清潔な水を使用する。

飲水場所以外の雨水も飲水する事があるが、その場合にも衛生的に保つようにする。

水浴び用のプールは設置する必要はない。